

研究テーマ	〔Ⅱ 思い（発想・想像・構想）を広げ、深めること〕 材料から発想を楽しく膨らませる指導の工夫 - 小学3年生「くぎうちトントン」の実践を通して -
-------	---

結城市立絹川小学校（龍ヶ崎市城ノ内小学校） 教諭 鈴木 亮子

I 研究テーマについて

小学校中学年の図画工作科における目標の一つに、「材料などから豊かな発想をし、手や体全体を十分に働かせ、表し方を工夫する」がある。この時期の児童は低学年での図工科や生活科での経験をもとに、表し方を工夫することに意欲的になったり、材料を何かに見立てて想像したりすることに熱中しやすくなる。また、工作などでは、はさみなどの使い方にも慣れ、自分の表現したいものが作れるようになってくる時期でもある。

本学級の児童は、図画工作に対して大変意欲的である。特に工作の単元などは各家庭から様々な材料を持ち寄り、自分の表したい作品に近づけようと制作に熱心に取り組んでいる。完成した作品には、随所に工夫が見られ、鑑賞会などでも互いに工夫したところや思いがけない発想などのよさを認め合いながら作品の鑑賞を行っている。

しかし一方では、材料の組み合わせや製作途中の形などから発想を広げたり、深めたりしていくことが苦手である。大部分の児童は制作に取りかかる前に、教科書などを見て「こういう作品を作りたい」という思いを持ち、「作りたい作品に近づけるためにどんな材料が必要か」と考え取り組んでいる児童が多い。たしかに、学習指導要領での表現（2）の領域ではこのような流れで作品を作っていくが、表現（1）の領域では、材料から発想を広げたり深めたりしていくことで造形的な能力を伸ばすことが求められている。

本学級の児童を取り巻く生活環境では、工夫しなくとも十分楽しめるゲームやテレビ番組などが溢れていることから、新たに発想して何かを作るという意識や発想が希薄な傾向にある。そのため、本来ならば発想の手助けや発想のスタートとなるべきはずの教科書の参考作品が児童にとってはゴールとなってしまい、なかなか教科書から離れられない児童が多いと思われる。

そこで今回は、児童の大好きな工作の製作を通して、材料から発想を広げたり深めたりしていくことで造形的な能力を伸ばしたいと考えた。そのため、様々なたくさんの木片を用意したり、自由に使える道具類を準備したりして、自分が気に入った木切れに楽しんで釘を打ち付けさせる活動を行い、その途中の形を何かに見立てたり、友達の感想やヒントも生かしたりして発想を深め、自分なりのテーマを決めさせたい。そして、さまざまな木片や大小のくぎを生かして、楽しみながら作品づくり行わせたい考えた。

☆ ねらいに迫るための手立て

(1) 様々な材料を多く用意する。

発想を得やすい材料でも、数が少ないと児童が材料と触れる機会が減ってしまう。様々な形や大きさ、手触りの材料を用意することで、児童の材料に対する思いが膨らむようにする。

(2) 自由に使える道具を準備する。

色々な大きさの釘、かなづち、くぎ抜き、ペンチ類、のこぎり等、絵の具などを準備し、児童が思い通りに製作できるようにする。

(3) 場の工夫

用意した様々な材料や道具を児童が自由にのびのび使えるようにする。そうすることで、児童が思いついたものをつくりたいという意欲付けにもなり、また、何でもできそうだという期待感をもたせる。

(4) 基本的なくぎの打ち方を掲示して、安全に作業ができるようにする。

くぎを打つのが初めてという児童が大半である。げんのうの重さから指を打ってしまいそうと感じる児童もいると思われる。そこで、不安な児童にとっても安心して作業ができるよう、道具の安全な使い方を十分指導する。また、黒板掲示資料としてくぎの打ち方を掲示する。また、どうしてもこわいと感じる児童についてはラジオペンチを用いるように配慮した。

II 実践例

1 題材 「くぎうちトントン」

2 目標

- 木片やくぎなどの材料に興味をもち、様々な活動を試み、楽しむことができる。
(関心・意欲・態度)
- 木片などの材料から想像を働かせ、作ってみたいものを思い浮かべることができる。
(発想・構想の能力)
- 釘打ちの方法を理解し、金槌の適切な使用法を身に付け、思い浮かべたものを作ることができる。
(創造的な技能)
- 友達の作品を鑑賞し、発想の工夫を感じ、互いのよさを見つけることができる。
(鑑賞の能力)

3 学習指導計画（3時間取り扱い）

時間	学習計画	評価の観点			
		関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	教師がくぎを打つ姿を見ながら、その方法を知り、小さな木切れに試し打ちをする。	くぎ打ちに興味をもち、進んで試し打ちをしようとする。		くぎを正しく打つことができる。	
1 本時	いろいろな木に様々な形状の釘を打ち、他の材料も用いて打ちこむ。	くぎを打った形から自分の気に入ったものを作ろうとしている。	くぎを打って作りたいものに近づけるように材料や打つ位置を工夫している。	様々な材料に合わせて、打ち方を工夫している。	
1	相互鑑賞会を行い、自他の作品の良い点、工夫点を認め合う。	友達の作品を見て、作品の良さや工夫点を積極的に見ようとする。			自他の作品を鑑賞し、互いの良さを認め合うことができる。

4 本時の学習

(1) 目標

木片に打ち付ける釘やビーズなどの材料と、木片との組み合わせを試し、新しい形や変化した形から、自分なりの発想を広げ試すことができる。

(2) 準備・資料

木片、金槌、釘、ビーズ、くぎ抜き、ペンチ類、木工用ボンド、絵の具、筆、黒板、掲示用資料、タオル、参考作品（完成品）

(3) 展開

学習活動・内容	教師の働きかけ（○）、評価（◎）
1 本時の学習課題を確認する。 いろいろな材料を木切れに打ち付けてみよう。	○友達と関わりを持たせながら活動できるよう、4人のグループにする。 ○工作の順序、時間配分を知らせ、見通しを持たせる。

<p>2 材料（木片）、道具を選ぶ。</p>	<p>○前時の活動を振り返り、釘を打つときの指や手の位置に注意を払うよう声をかける。 ○かなづちの持ち方、打ち方を確認し、安全面も留意させる。</p>
<p>3 各自制作する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・釘を選んでたくさん打ったり、木片を打ち付けるなど、思い思いに釘打ちを楽しむ。 ・釘を打った形から、どんなものを作るか考え、発表する。 ・付け加える木片やビーズ、釘の大小を選んで、付け加える等の作業を続ける。 ・絵の具を使って色を付けたり飾り付けをしたりする。 ・作品票に完成した作品の題名を書く。 	<p>○自由な発想が広がるよう、気に入った木片を自由に選んでよいことを告げる。 ○小さい木に太い釘を打つと割れることを知らせ、注意を促す。 ○並べて打ったり、密集して打つなど、打ち方による感じの違いをモデルで知らせ、発想の助けとする。 ○くぎが落ちたら拾う、友達が近くにいなか確かめるなど、基本的な約束についても全体で確認する。 ○くぎ打ちが怖いと感じる児童については、ラジオペンチなどを用いて打たせる。 ○何を作るか考えるために作業を一旦止め、釘を打った形を見させる。 ○途中の形からなにを作ろうと考えたか、それぞれの発想を発表させる。 ○それぞれの活動を見て回りながら、その発想を大切にし、認め励ますことで、児童が自信を持って取り組めるようにする。 ○発想がまとまらない児童には、話し合いながらヒントを与える。 ○友達の作業のじゃまにならないよう告げ、安全に作業できるようにする。</p> <p>○自分の作品の良さに気づけるよう、作品票には製作中に工夫した点や自分で気に入っている所なども書かせる。</p>
<p>4 後片付けをする。</p>	<p>○時間を守り、協力して後片付けをするよう励ます。 ○釘は危険なので、全員で探させ回収させる。</p>
<p>5 本時のまとめをする。</p>	<p>◎くぎなどを打ち付けた形から発想を広げ、つくりたいものをつくることができたか。 A：くぎや木切れなどの組み合わせから、自分のつくりたいものをつくっている。 B：教科書や友達の作品などから、つくりたいものをつくっている。</p>
<p>6 次時の活動を知る</p>	<p>○本時の活動を賞賛し、できた作品に自信を持たせる。 ○次時は自分の作品だけでなく友達の作品のよい所を見つける鑑賞会を行うことを伝える。</p>

5 学習の実際



A (材料を選ぶ)



B (好きな場所にくぎを打つ)



C (作品かざりつけ)



D (A 男の事例①)



E (A 男の作品)



F (作品)

釘やげんのうの取り扱いについて、実際に目の前で教師が制作をして伝えたのは効果的であった。児童は手を置く位置や打ち付ける力などを見て、具体的に打ち方を知ることができた。また、打っている時の音にも興味を示し、早く打ちたいという意欲も高めることができた。

児童が木切れを選ぶときに、選ぶ時間に制限を決めて行った。制限をしたことで、作りたいものが決まっていない児童も自分の持っている材料で何が作れるか考え、結果として木切れから発想を広げる手助けとなった。

(写真 A)

児童が好きな場所に釘を打ち付けている際に、教師は「何を作っているの？」と声かけをしながら机間指導を行った。その際、「ネコを作っている」など早い段階からイメージを膨らませ作りたい物を作ろうとする児童もいたが、半数程度の児童は「まだ何にするか決めてない」と言ってとりあえず釘を打ち付けているだけであった。そういった児童には「ここが特徴的だね」や「ここがいいね」と児童の作品の特徴的な所を言って児童の発想がより膨らむように支援した。

(写真 B)

制作時間が進み、多くの児童が自分の作りたい物に近づけるため、絵の具やモールなどで作品に付け足しをする中、自分の打ち付けた木切れを眺めている児童 A 男がいた。A 男は自分が手にした材料からカニを作りたいと思い、早い時間から制作していた。しかし、打ち付けることが難しく、自分の作りたい物が作れず、悩んでいた。

(写真 D)

しばらく悩んだあと、釘抜きを使い今まで打ち付けた釘を全て外し、違う作品を作り始めた。

煙突のついた家である。A 男に「カニじゃなくていいの？」と尋ねると、「こっちなら作れると思ったからこっちにした。すごく気に入った作品ができた。」と笑顔で話していた。初めて釘やげんのをもらった児童にとっては、道具がうまく扱えず、作りたい作品ができないということもある。A 男は、同じ木切れから違う作品をイメージして作ることができ、発想が広がったといえる。(写真 E)

他の児童の作品も、似たような形の木切れから自分なりの発想を働かせて制作することができた。教材キットではなく、たくさんの木切れから自分で材料を選んで作った今回の学習活動は児童にとってとても楽しく、心に残ったようだ。「一番楽しい図工だった。」という声も多く聞こえた。

Ⅲ 今後の課題

今後の課題として、次の2点が挙げられる。

1点目は、材料の確保である。今回の題材ではできれば校庭や校外に出て児童と一緒に材料探しを行いたかったが、現在の授業時数ではなかなか難しい。今回は運良くホームセンターから廃棄となる木切れをたくさんいただくことができたが、製材された似たような形のものが多くなってしまった。自然の木の幹のようなものも用いたかっただけに残念である。教材キットを使わず、どのように効果的に材料を集められるかは他の題材でも考えていきたい。

2点目は、道具の扱い方の指導である。多くの児童が初めて出会う道具であるげんのを対し、正しい使い方や、作りたい物を作れるだけの技能がないと、難しいということが分かった。今回は教師が範を示し、掛け図を用意しただけだったので、もっと道具の扱い方の指導をていねいに行う必要があると感じた。